

クロチョウガイ稚貝の疾病対策試験

仲盛 淳・狩俣洋文

1. 目的

近年、八重山海域で発生しているクロチョウガイ稚貝斃死の回避対策を検討する。

昨年行った試験で斃死発生後、稚貝を陸上水槽に避難させることで、海上飼育に比べ斃死の拡大は緩やかになることが観察された。このことから、薬浴による予防対策との併用や、適切な陸上水槽への移動時期の把握、陸上飼育における飼育密度や給餌の有無等と組み合わせることで、大量斃死回避対策が可能と考えられる。そこで今年度は斃死発生時期の一時的な陸上水槽飼育による疾病対策の可能性を検討した。

2. 材料と方法

試験に用いた稚貝は(株)琉球真珠で種苗生産され、西表舟浮地先で育成中の殻長 5 ～ 10 mm の稚貝を用いた。稚貝はラッセル籠に 120 個体ずつ収容したものを 40 籠用意して、川平湾にある真珠養殖用筏の一辺に、水深 5m の位置に等間隔で垂下した。

40 籠のうち 4 籠は水深 2m に垂下して、陸上飼育開始の指標となるかを調べた。稚貝垂下海域の水温が 27℃以下を 1 週間以上継続することを目処に、陸上水槽移動を開始した。その後、約 1 週間おきに陸上げを繰り返し、陸上げ時期による生残率への影響を調べた。陸揚げされた飼育籠は無作為に 3 グループに分け、1 つは過酸化水素として 5000ppm のマリンサワー SP30 海水、もう 1 つはホルマリン 1000ppm 海水で、それぞれ 5 分間の薬浴を行い、残りは対照区として陸上げと薬浴の相乗効果を調べた。

3. 結果

海上への稚貝の垂下は 10 月下旬に行った。2003 年 11 月 17 日に水温の低下が確認されたので 18 籠を陸上へ移動した。飼育籠は 6 籠を 1 試験区として

薬浴を行い、それぞれ異なる水槽へ収容した。この時点での大量斃死は見られなかった。その後、11 月 27 日にも陸上げを行ったが、この時点でも大量斃死は見られなかった。陸上水槽と海上で 2004 年 1 月 13 日まで飼育を継続したが、肉食性巻貝による食害以外、大きな減耗は確認されなかった。

4. 考察

今年度の試験では大量斃死が起らなかったことから、陸上飼育と薬浴の相乗効果を検討することは出来なかった。聞き取りでは西表舟浮地先でも同様に斃死は起こっていなかった。

文献

1) 仲盛 淳・狩俣洋文.クロチョウガイ稚貝の大量斃死調査.平成 14 年度沖縄県水産試験場事業報告書,沖縄県水産試験場,沖縄,2004;203-205.